

柳沢公民館 柳沢1-15-1 ☎042-464-8211 kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp  
田無公民館 南町5-6-11 ☎042-461-1170 tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp  
芝久保公民館 芝久保町5-4-48 ☎042-461-9825 shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp

谷戸公民館 谷戸町1-17-2 ☎042-421-3855 yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp  
ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 ☎042-424-3011 hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp  
保谷駅前公民館 東町3-14-30 ☎042-421-1125 ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp



大林宣彦監督

# 映画の力で 世界を平和に

谷戸公民館では、3月13日、西東京シネマ倶楽部の協力のもと、大林宣彦監督作品『この空の花ー長岡花火物語』(2011年)を上映しました。夏の空を彩る新潟県長岡の花火は、今から71年前の長岡空襲で亡くなった人々を慰霊する花火です。映画上映後の大林監督のトークから一部をご紹介します。

## 私の映画作りの原点

私は今78歳。敗戦の時は8つでした。物ごころついた時は戦争の最中。よい兵隊さんになって、お国のために死ぬのがいいことだと思っていました。ところが突然の敗戦。その夜、母親と二人で短刀を前に置いて夜を明かしたことを今も覚えていいます。子ども心に夜が明けるときにはお母さんは僕を殺して、自分も死ぬんだなと思いました。

ですがその後の記憶は、チョコレートにチョコレート。そしてアメリカ映画は楽しかったという思い出しか出てこない。実はこれはGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の占領政策で、アメリカはいい国だ、こんな国と戦争していたなんて間違っていたと日本人に思わせようとしていたんですね。さらに2年前に東京の大学で発見されたGHQの資料でわかったのですが、占領政策をうまくすすめるために、アメリカへの悪い感情をなくそうと日本人から早く戦争のことを忘れさせようとした。その結果、日本人はアメリカをお手本とし、原子爆弾が投下された国なのに、平和利用という形で原子力発電を受け入れ、町おこしと称してお兄ちゃんたちが命をかけて守ったこの日本を、日本人の手で壊していった。古いものを壊して新しいものを作る。高度経済成長下で、日本は日本古来の山河、そして日本人の魂という目に見えないものを失いました。町おこしは町壊しと同じ。ならば自分は町守りのふるさと映画を作ろうと決め、尾道を皮切りに、日本のいろんな里でふるさと映画を作るようになりまして。その中で、2009

## いつかパールハーバーで

長岡花火は単なる派手なイベント花火だと思っていたら違いました。8月1日夜10時30分。長岡の空襲が始まったと同時刻に、空襲警報のサイレンが鳴り響き、真っ白い花火がボンと打ちあがりました。長岡花火は空襲で命を落とした人々を慰霊する花火だったのです。

その時に、長岡の市長が、「こは、真珠湾奇襲攻撃を指揮した山本五十六の故郷です。彼はアメリカをよく理解し、アメリカが好きで、本当は戦争なんかしたくなかった。だから早く終わらせたくて、奇襲攻撃のリーダーになった。五十六の本当の願い、平和の花火をあの手でパールハーバーで打ち上げることが、長岡の政治家がやるべき仕事だと覚悟しています。命がけです」とおっしゃるので、では、私もこの花火を映画にして、あなたの花火と一緒にパールハーバーで上映しようかと約束しました。

## 敗戦の記憶を花火にして

今日上映した映画『この空の花ー長岡花火物語』で描かれているのはすべて実話です。富司純子さんが演じた空襲で背中にあぶつた娘を亡くした女性も実在します。この女性は本当は忘れない記憶だけれど、自分たちが忘れてしまつと戦争を知らない子どもたちが次の戦争を始めてしまつかもしれないから、語り部になつて伝えていきます。彼女に限らず、長岡には未だに長岡花火が怖くて見られないお年寄りが大勢いますが、二度

と戦争を繰り返さないように敗戦の記憶を花火にして永遠に残しているのです。日本人は戦争をすく忘れて、平和だ平和だと言つてうかれてしまつたけれど、長岡市民はちゃんと敗戦のことを覚えてるんですよ。

## 未来を生きる子のために

この映画は広島、長崎そして世界中を回り、2012年に長岡市と姉妹都市になったホルル市でも上映されました。上映後、真珠湾攻撃の遺族のご婦人が、私の手を取つて言いました。「サンキューベリーマッチ。映画を見てる間中、私の胸は嵐のように騒いでいましたけれど、静かになりました。あなたはこれから未来を生きるアメリカと日本の子どもたちのためによいプレゼントをしてくださいと信じます」。昨年、敗戦後70年目の8月15日に、パールハーバーで長岡の花火が3発上がりました。1発目はパールハーバーで死んだアメリカ軍兵士のために、2発目は長岡で死んだ長岡の市民のため、3発目はこれから未来を生きて、アメリカと日本の若者たちのために。

## 西東京なう 介護の現場で 志高く



ふじさわまこと 藤澤誠さん(27歳)

※コーナー名を当初予定していた「まちの風」から変更しました。仕事や地域活動などを通して、地元とかかわりながら生きる「若者」を紹介します。



昭和42(1967)年当時の西武柳沢駅南口  
西東京市中央図書館地域・行政資料室所蔵



現在の西武柳沢駅南口

## 写真で見る いまむかし 西武柳沢駅南口

昭和2年、西武鉄道村山線(現在の西武新宿線)の高田馬場〜東村山間が開通。これに伴い旧保谷市(当時は保谷村)内には東伏見駅(当時は上保谷駅)と西武柳沢駅の2駅が開設されました。  
※現在の西武鉄道は、明治25(1892)年創業の川越鉄道が前身の西武鉄道(大正11年・1922年創立)と明治45(1912)年創業の武蔵野鉄道が、昭和20年に合流してできました。

東町にある小規模多機能住宅介護施設「みどりの樹」。明るく、身内の入院時に病院スタッフの献身的な姿を見たこと。「下のお世話をするところなどを見て、衝撃を受けました。人の役に立つ、素晴らしい仕事だと思いました」と言います。その後、介護を学び、同所の納涼祭の手伝いから、ボランティア、アルバイトを経て、常勤のスタッフになりました。  
この仕事のやりがいは、利用者さんの笑顔や「ありがと」との言葉。「やってよかった」と言ってくれます。  
心から思う時間です。逆に変なことは、利用者さんの気持ちをいち早く察することです。特に新しい利用者さんには、次も喜んで来ていただけるように、「コミュニケーションを通して早くその方を理解しよう」と心がけています。うまく表現できない方もいるので、「この言葉でも必死にキャッチして、言いたいことを想像します」と同時に、常に視野を広く持つて、他の様子も気をつけるようにしています。  
他のスタッフからの信頼も厚く、同僚によると藤澤さんは利用者さんの存在がそばにいます。若者が日々がんばっている姿は、周囲の人たちの元気のもととなっています。